

認定社会福祉士制度下におけるスーパーバイザーの実態

－「スーパーバイザー実態調査」からの報告－

○ 久留米大学 片岡靖子 (3183)、岡田 まり (立命館大学・1740)、
野村豊子 (日本福祉大学大学院・4514)、潮谷恵美 (十文字女子学園大学・2079)、潮谷有二 (長崎純心大学・2675)
認定社会福祉士・スーパーバイザー・実態調査

1. 研究目的

認定社会福祉士制度では、スーパービジョンを「受ける」、もしくは「実施する」が単位化され、認定社会福祉士取得のために不可欠なものとして位置付けられている。しかし、その実施状況は明らかとなっておらず、本調査を実施することで、スーパービジョンの実態と課題を明らかにし、スーパービジョンの普及・充実に努めることを目的としている。

2018年4月1日現在、認定社会福祉士登録者数は、667名⁽¹⁾。認定社会福祉士認定・認証機構に登録しているスーパーバイザーは、575名⁽²⁾であり、体制は整いつつあると言える。しかし、スーパーバイザーの地域偏在、スーパーバイザー養成およびフォローアップ体制の未整備、多様なスーパービジョン実施状況の存在などの課題が予測される。

2. 研究の視点および方法

本研究の視点は、認定社会福祉士の個人認定を取得した者を対象に、スーパービジョンを「受ける」ことについての実態と課題について明らかにすることである。

研究方法としては、2017年4月時点で、認定社会福祉士の個人認定を取得した者484名を対象に郵送調査を実施した。調査期間は、2017年8月から9月末であった。

調査内容としては、認定社会福祉士制度下および認定社会福祉士制度外のスーパービジョンを「受ける」の実績やスーパービジョンについての考え、日頃のソーシャルワーク実践、仕事上の相談できる人の有無、研修会への参加の有無、研修会での講師経験の有無などについて尋ねた。

3. 倫理的配慮

本調査は、「立命館大学における人を対象とする研究倫理審査委員会」の審査および承認を得て実施した。また、調査票の郵送については、日本社会福祉士会理事会より承認を得て実施した。回答は自由であり、協力を辞退しても不利益を被ることがないこと、調査票は、パソコンにデータ入力後、廃棄（溶解）する旨の文書を添付した。

4. 研究結果

本調査の回収率は、484通の配布中、221通（回収率は45.66%）、有効回答率も同様であった。回答者の年齢の平均値は49.743、SDは9.4994であった。次にソーシャルワーカーとしての実務経験年数の平均値は、20.510、SDは7.5258であった。

スーパービジョンの必要性については、「まあまあ必要だと思う」「とても必要だと思う」との回答が、全体の96.0%を占め、多くの回答者がスーパービジョンの必要性があること

を示している。しかし、認定社会福祉士制度下におけるスーパービジョン経験者は 11.8%、集合方式の更新スーパービジョン経験者 22.9%であった。また、「3ヶ月以内にスーパービジョンを受ける予定」、「スーパービジョンを受ける具体的な準備をしている」、「いつかスーパービジョンを受ける予定」が、合わせて 38.0%であり、約 6 割がスーパービジョン受けるつもりがないことを示していた。一方、スーパービジョンを受けた者の総合評価として、「とても良かった」「まあまあ良かった」との回答者が 83.78%であった。

認定社会福祉士制度内外に関わらずスーパービジョンを受けたことのある経験者は、「ある」との回答者が 24.4%であり、制度内外に関わらずスーパービジョンを受けた経験者数が乏しいことを示している。しかし、仕事上の課題を解決するために相談できる人の有無については、「いる」との回答が約 8 割を占めていた。

スーパービジョンを過去 1 年間、全く受けたことがない理由として、最も高い回答数が「スーパーバイザーがいない」であり、次に「スーパービジョンを受ける時間がないため」との回答であった。

一方、回答者の日頃のスーパービジョン実践の自己評価は、個別レベルでは、「まあまあできると思う」「よくできると思う」が 72.18%、組織レベルでは 49.13%、地域レベルでは 32.01%であった。

5. 考察

認定社会福祉士の認定を取得しているスーパーバイザーは、経験年数が豊富であり、スーパービジョンの必要性、満足度についても高い割合を示していた。しかし実態としては、スーパービジョンを受けている回答者は乏しく、スーパービジョンを受けるために、スーパーバイザーや時間の確保などの確保などの環境整備が必要であることも明らかとなった。また、日々の業務の中で身近な相談者の存在により、解決、対応がなされている実態も示された。

スーパーバイザーの日々の業務の自己評価については、個別レベルでは高い自己評価が見られるも、組織レベル、地域レベルへと自己評価が低下しており、総合的かつ包括的な相談援助を展開するための課題も提示された。

引用文献

- (1)日本社会福祉士会 HP「認定社会福祉士 都道府県別登録者数」(http://jacsw.or.jp/10_senmon/nintei/files/toroku_meibo_todofuken.pdf,2018.5.6).
- (2)認定社会福祉士認定・認証機構 HP「スーパーバイザーリスト」(<https://acswo.csw-tms.jp/general/supervisor.php>,2018.5.6).

謝辞

本研究にご協力頂いた方々に心より感謝致します。本報告は、科学研究費助成事業・基盤研究(B) 課題番号 15H03440 (代表：岡田まり)「社会福祉士のスーパーバイザー養成プログラムの開発と評価」(平成 27 年度～平成 30 年度)の研究成果の一部である。